

ドアのノック

ホテルで知人を訪ねるとき部屋のドアをノックする。このノックの仕方が、欧米人と日本人ではかなり違う。わたしたち日本人は、襖や障子を開けるときに習慣で、控えめに‘トントントン’と、優しくノックする。「お願いします。開けてください」と哀願しているようだ。だが、かれらのノックときたら拳骨で実に荒々しく乱暴だ。‘ダダダダーン、ダダダダーン’とドアも叩き壊さんばかりだ。「お〜い、起きろ！」と、まるで脅かされているようだ。これでは、眠っていてもつい飛び起きてしまう。

欧米では家屋の扉が防犯上頑丈に作られていて、そのくらい乱暴に叩かないと部屋の中までは気がつかない、かつてのドアの構造上からあの叩くような激しいノックになったようだ。では、かれらには日本流の優しいノックの仕方がないかと言えば、それは別の用途で使われる。なんと男が成さぬ中となった女性の許を訪れるときに熱い想いを込め、‘トントントントン’と、優しくドアを叩く。すると秘かに待っていた女性がドアをそっと開けて男を部屋に招き入れるそうだ。いまでは、あの激しく叩くようなノックは、モダンなホテルなどでは似つかわしくないせいか、欧米のホテルでもなんの変哲もないチャイムに変わってしまった。‘ピンポーン’という無機質な音からは、まるでドラマが感じられない。

一方で、いまや消えつつある、あの激しい欧米流‘ダダダダーン’は文化面でも貢献している。‘ダダダダーン’は楽聖ベートーベンに暗示を与え、「運命の扉」を開き、あの名曲「運命」となって世に残った。